

## 岷江入楚と『幽斎 源氏物語聞書』

——真木柱巻を中心に——

永青文庫には本文書入れともに幽斎自筆とされる源氏物語が伝わる。同書は若菜巻を除いて、本文・書入れともに幽斎自筆とされる。そのため本書の成立について、本田義彦氏は岷江入楚より早いとされた。<sup>(1)</sup>

幽斎はかねがね諸注を集成すべき素志があった由であるが、本書はその諸注集成のつもりで書き込まれていたものではあるまいか。そしてその後で、通勝に諸注集成を委託したのであるうから、本書は岷江入楚成立以前、というより通勝が岷江入楚の仕事に着手する以前の成立と考えるべきであろう。とすれば、その注記の類似点は、岷江入楚が本書を参考にしての注記と考えるべきであろう。

野口元大・徳岡涼岡氏は「源氏物語誕生1000年！伝授された源氏物語の奥義と古注釈の享受過程を今に伝える。源氏物語最大の注釈書『岷江入楚』の礎を築いた幽斎の源氏物語研究の変遷を今に伝える」書として、本文校訂を除く書入れ部分を『幽斎 源氏物語聞書』（以下

小 高 道 子

幽斎聞書と略す）と題して翻刻・刊行された。<sup>(2)</sup> 徳岡涼氏は、注の末尾に「聞書」とする注記について、幽斎が紹巴説を直接あるいは兼如を通じて取り入れたものと推定された。<sup>(3)</sup>

しかしながら、同書の書入れを検討すると、特に「聞書」と記された注記には、岷江入楚に「不審」と記した疑問についての答を記した記述が多い。そのため、内容を検討する限り、『岷江入楚』の礎を築いた幽斎の源氏物語研究の変遷」を伝える書とは想定し難い。

岷江入楚は古注釈の諸説を集成した書と言われてきた。しかしながら、岷江入楚に記された注釈を検討すると、単に諸注を集成するばかりではなく、集成した古注を取捨選択し、自分の考えを記していることがわかる。<sup>(4)</sup>

本稿では、岷江入楚が継承した説に異同がある項目について、岷江入楚と幽斎聞書が諸説をどのように取り扱ったか、その過程を検証してみた。岷江入楚の引用は源氏物語古注釈叢刊により、検索のため

に古注集成の番号を付す。なお、煩を避くため、以下、叙述に際して、書名の『』は省略することがある。

### 一 幽斎聞書と岷江入楚

岷江入楚は諸注を集成したと言われる。しかしながら、単に集成するばかりではなく、諸説を比較する事により、諸説の中から「可然」とするものを選ぶうとしていた。公条の講釈を受けた四種の聞書について、その内容が異なった時、あるいは「秘」に同意し、あるいは「聞書」などの説に賛同していることを述べた。こうした諸注の中から選擇する姿勢は、公条に始まる聞書のみに限らない。岷江入楚には、花鳥余情や弄花抄などの説が異なる時に、どの様に判断すべきか迷っている過程が記されている。そのような岷江入楚に記された諸注が異なる項目を検討することにより、通勝の源氏物語研究について、検討を加えたい。

#### 1 心あさきひとのために

河、心あさき人とは髯黒大将の事をいへり いつはかりかさられてひたおもむきに此大将きすくなるまめ人とみえたり  
仍、心あさきといふ歟 かようなる人をは正直とて仏神のうけ給ふへきにや 兵部卿宮は心ふかくといへり

(中略)

弄 髯黒のもの北方の物のけを祈しは成就せず玉かつらの事を念せしは成就せし也 北方の心は物のけしうねきにあはせて玉かつらの心

をあさき人とかけり すへてわら、かに心ふか、らぬなるへし

秘 河海云心あさき人とは髯黒をいふといへる義アリ これも面白シ 又ノ義ハ髯黒の本台の北方の物のけをさま／＼祈り給しかとも其しるしもなかりし也 其故は物のけのしうねき故也 今此玉臺の事を祈り給へるには早く成就する也 是は玉かつらは心あさき人なる故に利生もすみやかなると也 此時は心あさき人とは玉かつらをいへり此説可然歟

箋曰 心あさき人とは弁おもとか事也 此人聊尔なる道ひきが高名にて石山の利生をあらはしたると云也 私云以上秘 此箋ノ義三光自筆ニテ首書アリ

私案するに此義三義ノ内愚意ハ猶河海ノ義ニ心ひくなり おと、も心ゆかすなといへるは源の事也 玉かつらも心に叶はず源の心にも髯黒を心あさきといへる義可然のよし存す 如何 又弄花に註する分愚意不庶幾如何猶可決之

「心あさきひと」が誰を指すかについて、「髯黒大将」とする河海抄と、「玉かつら」とする弄花抄・「秘」と、「弁おもと」とする「箋」の説が分かれている。岷江入楚は「箋」とする注記の後に「私云以上秘」として「此箋ノ義三光自筆ニテ首書アリ」と記す。この部分の「箋」は、秘説として継承されたものであり、「三光自筆」すなわち実枝の自筆で「首書」されていたというのである。

まず、この部分の概要を知るため、新日本古典文学全集により、本文、口語訳、頭注を引用する。

見るままにめでたく、思ふさまなる御容貌ありさまを、よそのものに見はててやみなましよと思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁のおもとをも、並べて頂かまほしう思へど、女君の深くものしと思し疎みにければ、えまじらはで籠りゐにけり。げに、そこら心苦しげなることどもを、とりどりに見しか度、心浅き人のためにぞ寺の験もあらはれける。(本文)

見れば見るほどすばらしく、理想どおりのお顔だちやお姿を、すんでのところでは他人のものにしてしまふところであつた、と思つただけでも胸がつぶれて、石山の仏をも弁のおもとをもいっしょに「並べておしいただきたい思いであるけれど、弁は、女君がひどくご機嫌をそこねてお嫌いになつたので、お仕えすることもなからず自宅にこもりきりなのであつた。なるほどそういえば、大勢の懸想人たちの気の毒そうな辛勞の数々をあれこれと見てきたのだが、結局、さして意に染まぬ人のために、石山の観音のご利益も現れたというしだいであつた。(口語訳)

玉鬢の情愛の薄い人、鬚黒。一説には、浅慮の人、弁のおもと。弱者への味方として「寺の験」があつたとする。(頭注)

全集は、「心あさきひと」を「玉鬢の情愛の薄い人」「一説には、浅慮の人」と解釈して、「鬚黒」あるいは「弁のおもと」を指すとしている。この事を念頭に置いて岷江入楚が引用している古注を検討してみ

よう。

「河」すなわち河海抄は、「心あさき人とは鬚黒大将の事をいへり」と記す。これについて「仍」すなわち公条は「心あさきといふ歟、かようなる人をは正直とて仏神のうけ給ふへきにや」という。これは河海抄がいう「心あさき人とは鬚黒大将の事をいへり」について、「かようなる人をは正直とて仏神のうけ給ふへきにや」と、「鬚黒大将の事を」「心あさき」ということに疑問を示したのであろう。そして「兵部卿宮は心ふかくといへり」と、「心あさき」の反対である「心ふかく」とい「われた兵部卿宮をあげて、「心あさき」ということばについて考察している。

「弄」すなわち弄花抄は、「鬚黒のものと北方」と「玉かつら」とを対比して、「鬚黒のものと北方の物のけを析しは成就せず」「玉かつらの事を念せしは成就せし也」という。そして「北方の心は物のけしうねきにあはせて玉かつらの心をあさき人とかけり」と、「北方の心」が「物のけしうねきにあはせて」いることと比較して「玉かつらの心をあさき人とか」いたという。そして「心あさき」について「すへてわら、かに心ふか、らぬなるへし」と記している。

公条説とされる「秘」は、「河海云心あさき人とは鬚黒をいふといへる義アリ、これも面白シ」と、まず「河海」抄の、「心あさき人とは鬚黒をいふといへる義」について「これも面白シ」と記す。その上で「又ノ義」として弄花抄と同様に「義ハ鬚黒の本台の北方」と玉鬢とを比較して、「此時は心あさき人とは玉かつらをいへり」と記す。そして「此説可然歟」と、「心あさき人とは玉かつらをい」うとする説を「可

然歟」とした。

岷江入楚はさらに「箋曰」として、「心あさき人とは弁おもとか事也」とする実枝の説を記す。弁のおもとは「聊尔なる道ひきが高名にて石山の利生をあらはしたると云也」と言い、「私云以上秘」と、この解釈が秘説であることを示している。なお、岷江入楚は、この後「此箋ノ義三光自筆ニテ首書アリ」と、「箋曰」が「三光自筆ニテ」記されていることを注記している。

このように、岷江入楚は、「心あさきひと」について、「鬚黒」「玉鬢」「弁のおもと」という古注に記されたり聴いたりした三通りの解釈をあげた。その上で「私案するに」として「此義三義ノ内愚意ハ猶河海ノ義ニ心ひくなり」と、この三通りの解釈の中では河海抄の解釈に「心ひく」ことを記している。そしてその理由を「おと、も心ゆかすなといへるは源の事也 玉かつらも心に叶はす源の心にも鬚黒を心あさきといへる義可然のよし存す」と記している。「私案するに」とあるように、通勝自身は河海抄同様「心あさきひと」を鬚黒と解釈していたのであろう。しかしながら古注などが三通りに分かれている事から「如何」と記し、さらに「又弄花に註する分愚意不庶幾如何」と弄花抄に対する疑問を記し、「猶可決之」と記した。

この項目について、岷江入楚の注は以上のみであり、「聞」「聞書」とする注などは引用されていない。岷江入楚に記された公条説とされる「秘」と、紹巴説とされる「聞」「聞書」について、両者は同じく公条の説を継承するものの、両者の内容は異なっていること、公条の講

釈内容は、二種類あったと推定されることを別稿で検討した。また岷江入楚に、「聞書に引歌あり」という記述が見られることから、岷江入楚は、紹巴の聞書に見られる記事でも、注記があることだけを指摘して、内容を引用しないことがあることを検討した。ここで、関連する注釈書の該当部分を併せて検討しておきたい。

細流抄・明星抄は、岷江入楚の「秘」として引用されている部分と同様である。「此説可然歟」という語も見られるから、「此説可然歟」というのは通勝の注記ではなく、ここまでが三条西家の説であったことがわかる。

孟津抄は「秘」よりはむしろ「仍」に近い。

寺のけんもあらはれける 其人の心中によりて験はある事也 尤北方不例を祈たれば験はなくて玉の事に験あり 靈験のある神仏も心のたむけやうによりてしるしあると也 石山寺の仏の験徳もあらはれたると云心也

河海心あさき人とは鬚黒大将の事歟 此大将ひたおもむきにす、みたるまめ人にてなさけふかき色このみにはあらずとみえたり 仍心あさきといへる歟 かやうなる人をは正直とて神仏のうけ給へき也 此巻に兵部卿宮の事を宮のこゝろふかくといへり 或本には寺のけんもなひかしけんかしとあり 義は相違有るへからす 但証本ことにはあらはれけんかしと云々

弄北方の心は物のけしうねきにあはせて玉の心を心あさきとかけり すへてわら、に心ふか、らぬ成へし云々

これらのことを念頭に置いて、この部分の永祿奥書紹巴抄(以下、紹巴抄と略す)と幽齋聞書とを比較してみよう。

紹巴抄

心浅き 大将北方観音へ祈念は不成就 玉のためには如此と也  
玉の心正直の人たるへし いたくとはいいたきにさ、けと云か  
ことし 河 うつほの物語にあり

幽齋聞書

心あさき人のためにそ 北方ノ祈ヲ不叶シテ大将ノ為ニハ祈叶と  
也 聞書  
ウツオノ物語ニ似タル古事也 聞書

「大将ノ為ニハ祈叶」する幽齋聞書は、「玉のためには如此」とする紹巴抄と明らかに異なっている。幽齋聞書の「聞書」とする注記が紹巴説をとりいれたとする徳岡氏の説には従えない。

## 二 幽齋聞書の「聞書」と岷江入楚

幽齋聞書の「聞書」が紹巴説を継承した、という徳岡氏の説を否定した上で、あらためて幽齋聞書の「聞書」とする注記を検討したい。幽齋聞書の「聞書」については、それが紹巴説を継承しないことを示すために、前項では幽齋聞書の「聞書」を、紹巴説、徳岡氏説とのみ比較した。ここでは、紹巴説、徳岡氏説から離れて岷江入楚の注記と幽齋聞書の「聞書」とを比較する。

2 437 み山木にはねうちかはし

岷江入楚

弄 大将のしほうなる躰をみ山木とよめり  
秘 五文字は大将を云 大将にしたかひてましますよと也  
河 み山木に髻黒大将をたとへたる也 紅葉賀に頭中将を源氏の  
中将に立ならひては花のかたはらのみ山木といへり 是も玉鬘内  
侍にならへてみ山木と兵部卿宮のそねまれたる也  
聞き山木とよめるは大将の唐名を大樹といふ其心也云々 此義不  
審

幽齋聞書

大将ノ唐名大樹ト云ニヨリテ也ヒケ黒ニナラヒ給フ無念ノ由迄也  
大樹ト當時公方様  
ヲ申セトモ大将ヲ云本成也

実践女子大学蔵常磐松文庫九条家本源氏物語聞書(以下九条家本と略す)

紹巴説は大将を大樹といへはなりそれ迄もなした、大将をこなし  
てよみ給也素然御説也

大将を深山木にたとえることについては岷江入楚が引用する諸注が一致する。ところが大将を深山木にたとえた理由について、弄花抄は「大将のしほうなる躰をみ山木とよめり」、河海抄は「紅葉賀に頭中将を源氏の中將に立ならひては花のかたはらのみ山木といへり 是も玉鬘内侍にならへてみ山木と兵部卿宮のそねまれたる也」と、大将の

「躰」あるいは「み山木に髻黒大将をたとへ」て表現したと注する。それに対して紹巴説を伝える岷江入楚の「聞」は「大将を大樹といへはなり」と、官職名から深山木と表現したとする。紹巴説のみが大きく異なるのである。

この紹巴説に対して岷江入楚は「此義不審」と記した。幽斎聞書の「聞書」とする注記は、「聞み山木とよめるは大将の唐名を大樹といふ其心也云々 此義不審」とする、紹巴説に対する岷江入楚の「不審」に答える形で記されたことがわかる。幽斎聞書に「大樹ト当時公方様ヲ申セトモ大将ヲ云本成也」とあるのは、「大将ノ唐名大樹ト云ニヨリ也」とする「不審」に対する説明であろう。岷江入楚の「聞」は「大将ノ唐名大樹ト云ニヨリ」と、「ヒケ黒」大将を「大樹」とする「紹巴説」に疑問を持ち「不審」と記した。幽斎聞書の書入れは、この「不審」について答えたものと推察される。岷江入楚は、「大樹ト云」うの「唐名ヲ大樹」とする事について疑問を持ち、「不審」と記した。幽斎聞書は、この「不審」に対して、「大樹」は今は「公方様ヲ申」すが、「大将ヲ云」のが「本成也」と答えたものであろう。幽斎聞書をこのように解釈すると、この部分は「大将ノ唐名大樹ト云ニヨリ也」という岷江入楚「聞」に記された「不審」に対する説明になっていることが分かる。するとこの幽斎聞書の記述は岷江入楚に記された「聞」み山とよめるは大将の唐名を大樹といふ其心也云々此義不審」とある「不審」に答えたものと推測できよう。この「大樹」について紹巴抄と源氏物語聞書覚勝院抄<sup>9)</sup>(以下覚勝院抄と略す)とは、それぞれ「大将

の唐名大樹 今は將軍までを申也」、「大将の唐名を將軍と云也大樹と云也(中略) 大樹將軍など、今は御一人をさして申也」と、「將軍」という「職」名を用いて説明している。「公方様」とする幽斎聞書とは別に行われた解説と推測できよう。

岷江入楚において、「秘」とする公条説には見られるが、紹巴の講釈を聞書した「聞」「聞書」とする注記には見られない記述があることを別稿で検討した<sup>10)</sup>。このことをあわせて、岷江入楚の記述を改めて検討してみたい。岷江入楚が「聞み山木とよめるは大将の唐名を大樹といふ其心也云々」とする紹巴説に「此義不審」と記したのは、「大将の唐名を大樹といふ」ことについてはなく、「大将の唐名を大樹といふ」ことから大将を「み山木」と詠んだとする紹巴説についての不審であったと推測される。すると「此義不審」とする岷江入楚の疑問に、官職名の説明をした幽斎聞書の「聞書」は、大将の「躰」あるいは大将を「たとへ」て「み山木」と詠んだとする、弄花抄以下の解釈を理解していなかったことになる。

また、岷江入楚に「秘」とする注のみがあり、「聞」「聞書」とする注が見られない項目は、幽斎聞書にも記述が見られないことが多い。これらをあわせて考えると、幽斎聞書の書入れが幽斎により行われて、岷江入楚作成の際の資料となったことは再考する必要があるだろう。



## 岷江入楚

秘 うたかた義さまくも 河海にみえたり いつれも只暫時の心也

私云 此哥心はよくきこえたり 五文字は長雨をかり用ルなり

うたかたは寧といふ字の心もよく叶へり 寧人をしのはさらめや人を忍ふ物をとといふ落着也 うたかたひと濁はわろし また暫時の心にても叶へき歟 しはしといふ心也 聞しはし也 暫時の心ならはしはしの間も人を忍はさらめやといふ義歟

## 幽齋聞書

ウタカタシハシモ也シハシモ源氏ヲワスレヌト也聞書

## 九条家本

うたかたとは或寧或争或シハシの心なり 巴説同事 此哥にては

しはしの心也 此やうなる所二置こと葉也

「うたかた」を「しばし」と解釈することは紹巴以外にも行われていることから、徳岡氏説のように、「しばし」と注をつけることが、紹巴説を取り入れた根拠にはならないことは、すでに述べた。ここでは岷江入楚と幽齋聞書とを比較する。岷江入楚では「うたかた」に「寧」の字の心があてはまるとした上で、「また暫時の心にても叶へき歟」と、「暫時」「しはしといふ心」に解釈することの是非を問ひ、さらに「暫時の心ならはしはしの間も人を忍はさらめやといふ義歟」と、聞いている。ここでも幽齋聞書は、岷江入楚の疑問に答えている。

4 559 かりの子

## 岷江入楚

秘 梟の子也 聞

(中略)

聞鴨の子を似せてしたる菓子となるへし 卵のなりなるへしと

あり 此事猶可尋之

## 幽齋聞書

引哥 アシネハウ カモノ子ヲカンニタトフルコト ウツホノ物

語二例アリ カルノコサカナニモスル物也聞書

## 九条家本

巴云卵のやうに御菓子二作りたり 鴨の子也かるの子共云五音相

## 通也

岷江入楚は紹巴説を弾いた後、「此事猶可尋之」と記し、さらに説明を求めている。これに対して幽齋聞書は、「カモノ子ヅカンニタトフル事ウツホノ物語二例アリ カルノコサカナニモスル物也」と出典を示して答えている。幽齋聞書は、ここでも岷江入楚の「此事猶可尋之」に対する答になっっている。

この部分については、岷江入楚に貼り紙があることが記されている。そして、かりの子についての注が記されている。「此事猶可尋之についての答は岷江入楚に注記されることもあった。」

5 349 時にうつる心

## 岷江入楚

花 是は式部卿の宮の詞也

聞 宮の心也

秘 大将の心の今さらなるにてもなき也 年来うかれ給へると也  
北方はあひ給へくもあれと宮のかくさ、へ給へると也

### 幽齋聞書

弄花ニハ宮ノ心トアリ

称名院殿大将ノ心ト也

只宮ノヒケ黒ノ北方へ仰ラル、ヨキト也聞書

### 紹巴抄

式部卿詞也花

大将の心と仍御説いか、

私花儀可然歟

岷江入楚は、紹巴が「宮の心也」と言い、公条が「大将の心」と説  
が分かれている両説を記している。これについて幽齋聞書は「弄花ニ  
ハ宮ノ心トアリ」「称名院殿大将ノ心ト也」と、それぞれの説の根拠を  
示したうえで、「只宮ノヒケ黒ノ北方へ仰ラル、ヨキト也」と、称名院  
説を言い換えて補足しているのである。すると、ここでも幽齋聞書  
は、両説を提示した岷江入楚に対して、説明をしていることになる。  
なお、岷江入楚には「聞 宮の心也」とあり、紹巴説が「宮の心」で  
あることを記しているが、紹巴抄には「大将の心と仍御説いか」と  
あり、紹巴は「仍御説」すなわち公条説が「大将の心」であることを

記している。「大将の心」とする「仍御説」すなわち公条説は、岷江入  
楚に「秘」として記された公条説と一致する。岷江入楚に載る「秘」  
と「聞」の内容が相違しているが、この部分について、公条は、紹巴  
にも同じ講釈をしたと推定される。

### 三 岷江入楚と幽齋聞書

以上検討したことから、幽齋聞書の「聞書」と記した注記は、岷江  
入楚が「不審」「歟」などとして記した疑問に答えていることがわか  
る。このように「聞書」とする注記が岷江入楚の不審に答えることは  
この四例に限らない。また、「聞書」とあるが、校異とともに行間に整  
然と書記されていることから、不審に対する答を聞きながら書記した  
というよりはむしろ、すでにまとめてある「聞書」を書入れたと推定  
される。

それではこれらの書入れは誰の聞書であろうか。聞書を含む書入れ  
については、本田義彦氏が同書について本田義彦氏は、「以上(極札な  
ど)から見ても、さらに筆跡などから見ても、本書は、本文・校異・  
注釈ともに、(中略)細川幽齋公の自筆と見ても問題はあまゝ」とさ  
れた<sup>7)</sup>。そして注記について、幽齋が「諸注集成のつもりで」書き込んだ  
と推定された。さらに「そしてその後で、通勝に諸注集成を委託した  
のであろうから、本書は岷江入楚成立以前、というより通勝が岷江入  
楚の仕事に着手する以前の成立と考えるべきであろう」とされた。

しかしながら「聞書」とする書入れを含む幽齋聞書の書入れは、これ



まで検討した通り、岷江入楚の「不審」や疑問に対する答になつてい  
る。「聞書」とする書入れが岷江入楚の「不審」に対する答になつてい  
る以上、その答を含む「聞書」とする注記を「岷江入楚の仕事に着手  
する以前の成立と考える」ことは難しい。岷江入楚に「不審」と記し  
た通勝に近い所で、幽齋聞書の書入れも書記されたと推測される。こ  
れまで幽齋聞書は、本文書入れともに同筆で、幽齋筆とされてきた。  
だが、同書に記された極を見ると、必ずしも筆跡のみで判断されてい  
るのではなく、奥書などの内容をあわせて判断されていることがわか  
る。筆跡のみで同筆と判断されたのでない以上、内容を検討した上で、  
再検討する余地は残されているであろう。

幽齋聞書について、徳岡涼氏は、「幽齋自筆源氏物語」とする事を  
提唱された。しかしながら、幽齋聞書は本文以上にその書入れが重要  
であろう。そしてその書入れは、幽齋が誰かの説を聞き取った、とい  
うよりはむしろ、岷江入楚の編集過程に近いところで書き入れられたと  
想定される。書入れの内容も、源氏物語についての注釈ばかりではな  
く、本文の校訂が見られる。こうしたことから本書を幽齋に絡めて名  
付けることには問題があると考えられる。慣例に従い所蔵者名で「永  
青文庫蔵本」などとする方が実態に近いであろう。

## 注

- (1) 幽齋源氏物語の研究(熊本大学国語国文学研究5)昭44・2)

(2) 続群書類従完成会。なお、引用は本書による。

(3) 「伝細川幽齋筆『源氏物語』の書入れについて」(上智大学国文学論集  
31、平10)、『岷江入楚』所引「聞」「聞書」について」(上智大学国文学  
論集33、平12)

(4) 岷江入楚の「聞」「聞書」については、「岷江入楚の「聞」「聞書」」(中  
京大学国際教養学部論叢 平26・11)で検討した。

(5) 岷江入楚の「秘」と「聞」「聞書」(中京大学国際教養学部論叢 平27・  
3)

(6) 特に注記しない限り、古注釈の引用は源氏物語古注集成による。

(7) 引用は永祿奥書紹巴抄(翻刻 平安文学資料稿)による。

(8) 引用は実践女子大学文学芸資料研究所『年報』による。

(9) 引用は源氏物語聞書覚勝院抄(汲古書院)による。

(10) 注(5)論文

付記 本稿は、平成25年10月26日東北大学における中古文学会秋季大会におけ  
る口頭発表に加筆したものである。発表について、多くの御高配・御教示  
を賜った。記して深謝申し上げる。